

翻
訳

Charlotte M. Brane 著『ドラ・ソーン(Dora Thorne)』(翻訳・その27)

堀
啓子

これまで『東海大学紀要 文学部』に連載してきた本稿は、『東海大学紀要 文化社会学部』に稿を移し、引き続き、『ドラ・ソーン(Dora Thorne)』の翻訳を掲げる。原著は長編物語であるため、分載二十七回目となるこのたびは、第三十二章および第三十三章の訳を掲げることにする。猶、原著も引き続いて Dodo Press の二〇一〇年リプリント版に拠るものとした。

*本稿は、科学研究費補助金【基盤研究(C)】【課題番号: 24K0367021】による研究成果の一部である。

三十二章

明るく太陽が彼女の部屋を照らし始めた時、人生において初めて、彼女は壁のほうに顔を背けて、朝の光景に怯えた。郵便の袋は朝の九時に館のホールから送られていくだろうーヒューは手紙をお昼に受け取るだろう。それまでは、彼女は安全だった。

正午を過ぎて時間が流れたが、その夏の日は一日中、彼女にとつて悲惨な時間だった。わずかな風の音や、大きく響く扉のベル、速い足音などが聞こえるたびに、彼女は青ざめて心臓の鼓動が止まるような気がした。

アール卿夫人は、そんな彼女を心配そうに眺めていた。この館の生命そのもののように、光輝やいていたこの若い娘に何が起ったのか、彼女にはわからなかった。この娘は時々やたらとはしゃぐのだった。リアンも、何かが姉の神経を参らせていることに気づいたーだが、それが何かはわからなかった

その日、十五回目となる、ホールのドアベルが響いた時、ベアトリスはどうしようもなく、唇を震わせながら、顔を上げた。ついにアール卿夫人は、彼女の両手をしっかりと自分の両手で包み込んだ。

「ねえ、あなた」と彼女は言った。「このままではあなたは神経性の発熱に見舞われてしまいますよ。物音がするたびに、なぜそんなに驚くのです？ あなたはまるで何か恐ろしいことが起きるのを待ち構えているかのようにですよ。」

「私を神経質だとおっしゃる方はいませんわ。」と、苦勞して自らを律し、微笑みながらベアトリスは答えた。「お母様が私に対して、一番不満をおっしゃっていたのは私が物事に動じないと言うことでした。」そして自分自身に対しては「こんなことはもう続けられない。こんな苦悩の中で生き続けるくらいなら、一思いに死んだほうがマシだわ」とつぶやいた。

だがこの辛い日も暮れ、ベアトリスにとって良かった事は、エアリー卿が共にいなかったことだった。アールズコートに滞在中の紳士たちは皆、グランジに住む老ニュートン卿主催の、独身男性の食事会に招かれていた。彼らは遅く戻ったので、エアリー卿もベアトリスの異変に気づかなかった。

「今日は無駄な一日でした。」と、彼女に就寝の挨拶をしながら彼は言った。「なぜなら、あなたと一緒にいられなかったからです。食事会が永遠に終わらないような気がしていましたよ。」

どんなにひどい一日だったか思い出しながら彼女はため息をついた。また一日、こんな日を過ごすことができるだろうか？ その夜は半ば眠らずに、もしヒューの返事が明日の第一便の郵便で到着し、

アール卿がブロックフィールドからのその手紙に気づいたら、何か言ったりはしないだろうかと彼女は考えこんでいた。だが幸運が訪れた。翌朝は、ライオネルが話していることにアール卿は一生懸命耳を傾けており、自分に代わって郵便の袋を開けてくれるようにと、彼はベアトリスに頼んだ。彼女はまた、自分宛の、嫌な一通の青い封筒を見出した。他の手紙を全て配り終えると、彼女は誰にも見られないようにその封筒をドレスのポケットにしまい込んだ。

ついに朝食が済み、エアリー卿がリリアンと話している隙に、ベアトリスはその手紙を読もうと急いだ。そこには、ヒューの怒りのようなものは何も書かれていなかった。しかし、もし彼女が彼のことを好きだったなら、彼の素朴な言葉に潜む悲しみが、彼女の胸を痛ませたに違いなかった。彼は、彼女からの手紙を――彼女には、まるで似つかわしくない、その手紙を――受け取ったと述べた上で、自分の船のことである重要な仕事があり、ロンドンに行かねばならないこと、そして三週間は戻れないことを急いで知らせてきたのだ。そして、戻り次第すぐに手紙を寄越し、彼女に会ってあの約束を守るように求めるとも書いていた。

これは短い猶予だった。三週間もあれば、いろんなことが起きるだろう。彼女はその手紙をビリビリに引き裂いて、致命的な重みから解放されたかのように感じた。この時間稼ぎの間、ヒューが戻るまでに、フルベルト・エアリーとの結婚が早く進むような何か起きるかもしれないと彼女思った！ 少なくとも今、彼女は自由だった。

馬での遠乗りか、散歩でも、と、エアリー卿が彼女を誘ったとき、彼女はいつもの彼女だった。彼女の顔は、美しい花のようで瞳には光が宿った。一日中、彼女は快活だった。もう、大きなベルの音や速い足音に震える必要はなかった。三週間は長い時間だ――色々なことが起きるだろう。「ああ、エアリー卿が私に、すぐに結婚するようにと言ってくださりさえすれば！」

まさにその夕べ、エアリー卿は彼女に、ご一緒に散歩をと声をかけた。彼はただ彼女とだけ話しかかった、と言うのも、彼は翌朝ここを離れるので、彼女に色々話しておきたかったのだ。

「どこにいらつしやるのです？」と彼女は悲しげな不思議そうな眼差しで尋ねた。ここから逃れてしまおうというチャンスは、早くも失われたようだった。

「リントンに帰ります。」と彼は答えた。「新しい建物のプランを見るためです。すぐに着手せねばなりません。例えば我々が一年を外国で過ごすとしてもなかなか終わらないでしょうから。十日から二週間ほど、あちらにおります。私が戻ったら、ベアトリス、あなたにお尋ねします。何をお尋ねするかお分かりですね？」

彼女の顔には、笑顔はなかった。おそらく彼は、三週間は戻らないだろう。もはや彼女にここから逃れてしまおうというチャンスなどあり得ようか？

「いつ約束を守っていただけるかお尋ねせねばなりません」と彼は続けた――「いつ、本当にそして言葉通り、私の妻になってくださるのか、です。私に対して厳しくなさらないでください、ベアトリス。私はあまりにも長い間、待っていたのです。私の留守の間、そのことを考えていて下さいますね？」

アール卿は、娘の表情に気づいて微笑んだ。エアリーがここを離れ、そのために娘はがっかりしているのだろう――それは当然のことだった。娘がそれほど彼を愛していることを知り、父は喜んでいった。彼は、レディー・ヘレナに、ベアトリスがこれほど深く誰かを愛することになるとは思っていなかったと話した。レディー・ヘレナは、自分は、ベアトリスほど誰かを深く愛したり、憎んだりできる人間は知らないと思えた。

その朝、エアリー卿があまりに長い時間を別れの挨拶にかけているので、レディー・ヘレナは、彼が気を変えて、ここにとどまることにしたのかと思いはじめたほどだった。ついに彼は出発したが、彼はベアトリスに毎日手紙を書くことと約束し、館の人々にも丁寧な挨拶をして発っていった。

彼は去り、ヒューも行ってしまった。三週間の間、彼女は何も恐れることなく、何の希望もなく、ただ憂鬱に過ごしていた。父親とレディー・ヘレナは、恋人が不在のせいで、彼女は悲しそうにしているものと思っていた。アール卿の心を喜ばせていたあの音楽のような笑い声は消えてしまった。彼女は異様なほど静かだった。その

美しい顔は青ざめて悲しそうだった。彼らは微笑んで、それが自然なことだと思っていた。リリアンは、姉の顔に浮かぶ表情の全てを知っていたために次第に心配になり、誰も気づかなかったが、姉の身体か心に何か病気があるのでは、と恐れていた。

彼らは、彼女は留守の恋人を思い、彼がいないので、がっかりしていると思っていた。が、実際には彼女は、たった一つの考えにとらわれていた。どうやらヒュー・ファーンリーを追い払うことが出来るだろうか？朝も昼も夜もこのたった一つの疑問が彼女を悩ませていた。彼女は他の人々と話をし、笑い合いました。だが、少しでも沈黙が続くと、この美しい顔には、リリアンがかつて見たこともないような上の空の表情が浮かんだ。ベアトリスは、普段とても用心し、注意深く気を遣っていたが、時には彼女が都合よく身に付けている仮面が剥がれ落ち、その時に彼女を見ていたリリアンは、姉にとってあまり良い状態ではないことがわかった。

ヒューから自由になるためには何をしたら良いのだろうか？その日ずっと新しい計画が浮かび。中には、爆発的な不自然な笑いを誘うような馬鹿げたものもあり、どれも実現可能には思えなかった。大胆で機転が利き、頭の回転が速く、豊かな想像力にも恵まれた。知識と知性の全てをもつてしても、彼女には何もできなかった。日夜、ただ一つの疑問が消えることはなかった。ヒュー・ファーンリーからどうやったら逃れられるのだろうか？

三十三章

丸一週間が過ぎたが、ベアトリスが待ち望んでいた「何か」は起きなかった。日々は、静かに、そして何事もなく過ぎていった。彼女の父とアール卿夫人は、彼女の結婚のための準備の話し合いに忙しかった。ライオネル・ダッカーとリリアンは日々、夢の国の中を彷徨っており、エアリー卿は毎日手紙を書いてきた。アールズコートに黒い秘密の雲がかかっているなど、誰も夢にも思わなかった。

毎朝ベアトリスは、若さ故の楽観的な希望的観測から、自分自身に言い聞かせていた。「今日は何かが起こるわ。」そして毎晩彼女は思うのだった。「明日は何かが起こるわ。」しかし日々は、彼女が待ち望んでいるような出来事や事件も何も起きないままに、静かに過ぎ去っていた。

与えられた猶予期間は、あつという間に過ぎていった。三週間目が終わり、エアリー卿が帰ってきて、ヒュー・ファーンリーがアールズコートに舞い戻ってきたらどうしたらいいのだろうか？陽光の降り注ぐ日がな一日、この疑問は彼女を苦しめた。この長引く恐怖の苦しみに耐え続けるよりは、いつそ一思いに死んだほうが楽だと思うことさえあった。

だが、彼女は若く、若さというものはいつも楽観的だった。彼女には勇気があり、めったに絶望したりしなかった。彼女は自分の厄介な立ち位置を認識することなく、何かが起きて、自分をフルベルト・エアリーから遠ざけることがあり得ようなどと考えもしなかった。

た。

たった一人、ベアトリスの変化に気づいたのは妹のリリアン・アールだった。リリアンは、姉の、あの快活さ、明るい受け答え、家中をあんなにも明るくしていた楽しげな話しぶりが消えたことを悲しんでいた。何度も何度も、彼女は姉の何かがうまくいっていないのだろうと、自身に語りかけていた。

リリアンは自分も秘密を持っていた――それは彼女自身にさえも、ささやくことさえできないものだった。幼い子供の時から彼女はいつもベアトリスに道を譲ってきた。えこひいきされていたわけではなかったが、その意志の強い、若い美女は、自分のしたいように振る舞ってきた。人々を惹きつける立ち居振る舞いと快活さで、彼女は人々の視線を釘付けにした。そのためリリアンはいつも見過ごされがちな側にいるのだった。

彼女はとても美しく優しい――ロナルド・アールの金髪の娘だった。その顔立ちが人が天使を描くときに写し取るような、汚れを知らぬ神秘的なものだった。優しいバイオレット色の瞳は雄弁で、白い額は思慮深さを表していた。その美しさは決して目の眩むようなものではなく、人の心に嵐を呼び起こすようなものでもなかった。だが人の心に少しずつ、忘れがたい印象を残していくような類のものだった。

彼女は思いやりがあり、謙虚な性質だった。世間ずれしたところ

もなく、奢り昂るようなこともなかった。

愛らしく、落ち着いて穏やかで、あらゆる幸福の高みや絶望の深淵を知ることなく――優れた忍耐強さと愛すべき気質を持ち、リリアン・アールが怒ったり、慌てたりしているところは誰も見たことがなかった。彼女の存在そのものが、安らぎと平和に満ちていた。

生まれつき、彼女は多くのものを与えられていた。彼女は、聡明で創造力に富み、稀有で優美な想像力を持っていた。そしておそらく彼女の最も大きな才能は、世俗にはないものを強く深く愛することのできる力だった。

それは、リリアンが押しつけがましい「説教」をするとか、不快なほど「行儀が良い」ということではなく、崇高で神聖な物ごとの考え方が、自然に彼女に備わっていたことだった。アール卿は楽しいことを求める際にはベアトリスを呼びにやっ――彼女ほど、彼を楽しませてくれる者はいなかった。そして、彼が慰めや助言や共感を求める際には、彼はリリアンを呼びにやっ。明るさと暖かさをもちたらず陽光を愛するように、誰もがリリアンを愛していた。

ライオネル・ダッカーは、誰よりも彼女が好きだった。彼がただ不思議に思っていたのは、リリアンがそばにいる時でさえ、誰もがベアトリスを見てしまうことだった。彼は時々、彼女が彼自身のために創られた存在ではないということを不思議に感じていた――と

いうのも、彼が弱っているときには彼女は力強く、彼女の落ち着いた静かな忍耐強さは彼の短気を制御し、彼女の優しい思慮深さが彼の向こうみずなところを補ってくれて、彼女の優しく上品な謙虚さが彼のプライドを是正してくれるためだった。

彼女は、彼自身が自覚している以上の大きな影響を彼に与えた――彼女のたった一言が、彼に驚くべき作用を及ぼした。彼は、彼女の美しさを愛していたが、何よりも彼女の純粋で、この世に巢食う悪が世に落とす影など考えたこともないような、純真な心を愛していた。

ライオネル・ダッカーは、女性に対して特有の考えを持っていた。彼の母親は若い時、美しい人で、特に世俗的な女性だった。彼女が彼に教えたたった一つのことは、どのように体裁をつくるい、どのようにしてもはやされる人生について学び、そうした生活を維持するのなことだった。

彼女は流行を追う女性で、常に少ない資産の中で苦勞していた。そしてその嘘や、感心しない振る舞いや、彼女が実践していくつまらない姑息な策略によって息子が心を病むこともあった。

成長するに伴って彼が世間を眺めていっても、彼はあまり良い印象は受けなかった。彼の母親のグループの貴婦人たちは、皆、一番良い位置を占めようともがいていた。全ての女性は同じなのかと思うまでに、彼は羨望や嫉妬やスキャンダルや不誠実な話を耳にし続

けていた。

彼自身は、並外れて誠実で、高貴な気質を有しており――すべての嘘や、偽りの上辺飾りを彼は嫌悪した。彼は理想の妻像を思い描くようになり、それを具現化する女性に出会うまでは結婚せずに生きていく決意を固めていた。

リアン・アールがその理想像だった。彼は注意深く彼女を眺めた。彼女は誠実で、陽の光のようにすばらしい性質を持っていた。彼は、例え世間に通用しているちよつとした言い訳のようなものでさえ、一言たりとも彼女から嘘を聞いたことはなかった。彼は自身自身に、もし誰かが完璧であるとするならば、それは間違いなく彼女だろうと言うのだった。彼自身の表現を借りるならば、彼の心の望みは彼女の中にあるのだった。彼がずっと望んできたこと、あるいは夢見てきたことは、彼女のうちに見出された。彼は思慮深く行動し、彼自身の強い気質のうちの全ての熱意を込めて、彼女の愛を得ようとした。

当初、彼女は彼のことがわからなかった。しかし、次第に彼女の純粋で、若い心が意識し始めたことに、彼は気づいた。それは、かつて見たこともないほど、可愛らしい愛の目覚めだった。彼の足音や声を聞くと、彼女はうつすらと頬を染め、目を輝かせた。そして彼が彼女のそばに立ち、彼女の秘められた思いを知ろうと身をかがめると、彼女は一言二言、話すだけで、急いで彼のそばから立ち去った。彼女の散歩や乗馬に同道したいと言うと、震える唇で目を泳

がせ、彼女は容赦を願うのだった。

彼女は自分に何が起きているのかわからなかった――なぜ世界が、突然、こんなにも美しく見え始めたのか――高い空が、なぜこんなにも新鮮に輝いているのか。おぼろげながら甘美な幸福が、彼女の優しい心を目覚めさせた。半ばおびえつつも、彼女はライオネルの前にいることを望んでいた。彼が近づいてくる時、小さな両手は震え、綺麗な顔ははてって紅潮した。だが、彼女の満ちたりた幸福感は最高潮に達していた。

ライオネルはすべてを見て取り、どのようにすればこのような貴重な宝物である、純粹で無垢な少女の愛情が自分のものになり得るかと考えていた。その愛にふさわしいどのようなことを自分はしてきたであろう？彼女を通して、彼は他のすべての女性を尊敬するようになり、彼女を通じて彼は崇高で神聖な、今まで見過ごしてきたような教訓に耳を傾けるようになった。彼女は彼の理想そのものだった。もしも彼女に失望することがあったとすれば、この世の全てが偽りであった時だが――そんなことが起こりうるはずはなかった。

どのようにして彼女に愛を告げたら良いのだろうか？それはまるで驚いて怯える鳥を籠に閉じ込めてしまうようなものだった。彼は、彼女の清らかな純真さを前に、どぎまぎして立ち尽くすのだった。それでも、彼が求愛して彼女を手に入れようと決意する時が来た――それは彼女なくしては生きていけないと感じた時だった。そして彼は、この愛らしいリリアン・アールを妻にせねばならない、でな

ければ、二度と他の女性の顔を見る事はないだろう、と自分につぶやいた。

ライオネルは、ベアトリスにかすかな嫉妬を感じていた。彼は自分たちの結婚はなるべく後にしようと考えていた。彼は、彼女がリリアンを陰らせているように想像していた。もしアール卿に、自分の恋について語ったならば、彼は両方の結婚式を同じ日に挙げるべきだと主張するだろう。そうすると、彼の綺麗な優しい恋人はいつものように、その輝くような姉の陰に隠れてしまうだろう。

「そんなことは決してあつてはならない」と彼は独り言を言った。リリアンは、栄光を分かつことなく、彼女自身の結婚式を挙げなくてはならない。

彼はアール卿には、ベアトリスの結婚が済むまで何も言うまいと決意した。間違いなく、彼女の結婚はすぐに挙行されるだろう――エアリー卿は彼女がいなくては過ごしていけないかのように見えた。彼らが結婚して去ったら、リリアンは賞賛と愛情を独り占めできる順番になる。誇り高く、嫉妬から来す心遣いが、偏に彼の話を遅らせることになった。

そして、リリアンも自分の秘めた感情について気づいた。彼女は自分がライオネルを愛していることがわかった。彼は他の誰のようでもなかった。こんなにもハンサムで、勇敢で、善良な人がいるか？率直で誇り高い表情や、額の後ろへと無造作に撫で付けられた

波打つ髪を、彼女は恥じらいつつ眺めるのが好きだった。そして彼女の声は、彼女の心で音楽を奏で、そして彼は本当に自分のことを好きなのかと訝しんでいた。

愛すべき非常な謙虚さから、彼女は、彼が自分をどれほどの高みへと隔てているのかなど考えてみたこともなかった。まるで臣下の者が女王に対するように、彼が彼女を見上げているなどと夢にも思わなかった。彼はいつも彼女のそばにいて、彼女にあらゆる気遣いを見せ、彼女の助言と共感を求めたが、決して口にしない言葉があるようだった。リリアン・アールは、彼が自分を愛しているのだろうかと、何度も何度も自問した。

ただ彼女はすぐにそれを知ることになった。アール卿の何気ない言葉から、ベアトリスの結婚が十一月に執り行われることをライオネルは知った。そして彼は決心した。彼女の同意が得られたら、リリアンの結婚式は、春の花が咲き誇る頃に挙げられるべきだと。

八月は、太陽の照りつける日々とともに過ぎ去った。九月の初め、リリアンは深く澄んだ湖のほとりに一人で佇んでいた。ライオネルは彼女を見つけて彼女のもとに急ぎ、彼女がなぜこれほど憂いに満ちた表情をしているのか、不思議に思った。

「何をお考えですか、リリアン？」と彼は尋ねた。「あなたはとても悲しげで不安そうです。」

「私はベアトリスのことを考えていました。」と彼女は答えた。「彼女はずいぶん変わって、以前とはまるで別人です。私にはそれが理解できません。」

「私にはわかります。」とライオネルは言った。「彼女はまもなくここでの生活に別れを告げることになることを、あなたは忘れなのです。彼女は新しい世界へ行きます。その変化はとても大きなものですから、色々な思いがあるのでしょうか。」

「姉は、エアリー卿を愛しています。」とリリアンは応じた――彼女は、まさにその時でさえ、あの歌うような声が、「私は彼をとっても愛しているの、リリー」と響いているように感じていた――「姉が不幸になる事はありません。」

「そのようなことを申しているわけではありません」と彼は答えた。「思いを巡らせ、沈黙を貫くことは、消して不幸ゆえではないのです。ああ、リリー」と彼は叫んだ。「あなたが私の心を占めているこの思いについて少しでも想像してくださることがあるのかと私は考えています！私がどんなにあなたを愛しているか、あなたが知ってくださいているのかと私は思い悩んでいます。いいえ、私から顔を背けないで、怯えないでください。私にとってあなたは、世界中の女性の中で、最も誠実で高貴で美しい人です。少しでもあなたから離れようなどと考えたことも思ったこともないほど、あなたをととても深く愛しています、リリー。私があなたにとってふさわしくないことはわかっています――あなたは、空の上で、輝く太陽のように、

私の遙か遠い高みにいらつしやるのですが、なさろうと思えば、あなたは私を思い通りになさることができるのです。私を好きになつてくださるでしょうか？」

彼女は愛らしく紅潮した顔を挙げた。幸福が、その綺麗な目を輝かせていることに彼は気づいた。だが、彼女は何も言えなかった。言葉は彼女の唇に飲み込まれたようだった。ライオネルは小さな白い両手を自分の両手で包みこんだ。

「あなたを怖がらせた事はわかっています、リリー。」と彼は優しく言った。「こんなに性急に話してしまったことをお許しください。すぐにお返事を、など望みません。私を試してください。――あなたが、私を愛することができるとか、何週間でも何ヶ月でも今から何年でも。私は喜んで一生あなたを待ちましょう、そして良い時間の使い方をしたと考えましょう。私を好きになつてくださることはできそうでしょうか？」

「あなたのことは好きですわ。」とだけ、彼女は言った。

「では、私を愛するように努力すると約束してください。」と彼は強く言った。「よろしいでしょうか、リリー？あなたが私に望むことなら何でもします。私はあなたの半分でも善良な人間になるようにベストを尽くします。約束してください、ねえ――私の人生は、あなたの答えにかかっているのです。」

「約束します」と彼女は言い、この言葉がどんなに多くの意味を持つのか、彼にはわかった。

彼が包み込んでいる小さな手には美しい指輪がはめられていた。それは金の台に大きな一粒の真珠の輝く指輪だった。ライオネルはそれを彼女の指から引き抜いた。

「これを私に持たせてください、リリー」と彼は言った。「そしてベアトリスが結婚して去っていったら、私はアール卿のもとへ行き、あなたを私にくださいとお願ひします。今は参りません。少しの間、秘密にしておきましょう。二つの恋愛が一度に進むのは、多すぎます。あなたは私を愛することを学んでください。そして、春が来たなら、その頃までにベアトリスがエアリー卿を幸せにしているように、あなたも私を幸せにしてください。リリアン、あなたは私の真珠で、この指輪はあなたを思い出すよすがとします。私をとても幸せにするために、あなたも喜んでいとおっしゃってください。」

「それ以上のことを申し上げましょう」と彼女は、幸せでいつぱいの表情を浮かべながら答えた。「もう半ば以上、あなたを愛することを学び終えたと言うことができます。」

彼は綺麗な両手に口づけし、あえて唇で触れることはせずに、きれいな紅潮した顔を眺めた。

「感謝の言葉ありません」と感情を抑え切れない声で彼は言った。「私はあなたのために生きましょう、リリー。そして私の人生の全てを以てこの感謝を表しましょう。早く春が来れば良いのですが。その頃までには、あなたは私を愛してくださるでしょうか、と思っています。」

(以下、次号)

堀 啓子

「
翻 訳
←

Charlotte M. Brame 著 『ドラ・ソーン (Dora Thorne) 』

(翻訳・その 27) ←

←

堀 啓子←

←

A Translation of *Dora Thorne* by Charlotte M. Brame ②7←

←

HORI Keiko←

←